

「ココロの基準値」が創発する川の文化

日々、子どもをめぐる筆舌に尽くしがたい暗黒の事件があとを立たない現代日本。

しかし、「川の日」ワークショップは、このようなやりきれない状況を超えて、生きることに隣接する悲劇の根源をなくしていく未来への構図を確実にひらきつつある。

今年の公開発表・選考の2日間も、そのことを鮮やかに実感させてくれた。とりわけ、最終選考に残ったプロジェクトの中には、子どもと川が相互に浸しあう関係の中で、人間も河川も生命を高揚させる状況の実現が見られる事例がいくつもあった。

例えば、矢作川・飯野川では、子ども達が28年間、連続一万日にわたる水質汚濁調査を行なってきた。始めた頃の白く濁っていた水は30cmの透視度計で測れたが、今年からは150cmの透視度計を用いるようになり、確実に水質がよくなってきている。

こうした科学的観察の事実をストレートに発表するだけではつまらない。西広瀬小学校6年生10数名は、当日、舞台上で長年に渡る川とのかかわりの物語を寸劇的に表現した。彼らは川の魚の気持ちになり、蛍のイノチの光となり、水質をひらひらした布の色合いで示し、短時間に長期間の環境改善のストーリーを楽しませいっばいに示した。子ども達の感動的な身振りと言語に触れた人々は、出来事を具体的に垣間見ることを通して、川が生を回復していくこととその過程を見守り続けることの意味を心に留めていった。「出来事から意味が湧き出す瞬間に立ち会う」ことは、生き生きと分かることをもたらし、抽象的観念ではなく、生彩ある実践知を触発してくれる。

物語を孕んだ寸劇という「遊び心」にみちた表現法は、科学的観察の定型が陥る、ある生真面目さの毒を抜いている。こうした科学的アプローチと物語的アプローチの両立によって、関わる子どもたちの内面に、そして聴いている他者に、川と人の生のあり方の意味が伝わっていく。

このケースでは、水質という「物的基準値」を測定しながら、川にかかわり、かつ、寸劇表現のワクワク・ドキドキの楽しさや、子どもと地域住民の触れ合いが発する大人や他者への敬愛などの「ココロの基準値」を高めていることは注目に値する。

寸劇にふちどられた物語的表現は、人と川のかかわりの筋を描く力がある。筋を描くということは、人のココロの中に状況を変える志向や希望を促がすことであり、文化創造的な行為である。これからの河川整備・まち育ての取り組みにおいては、従来の技術的・合理的行為を超える文化創造的行為がいっそう重要となってくる。ここでいう文化とは、人々の川への多面的かかわりが発露し、その意味を多世代間でかつ住民、行政、専門家間に伝達・交流しあうことである。

「川の日」ワークショップに登場する子どもの視点からのキリクチは、決まって、科学と物語のカップリング、理性と感性の結合、まじめさと楽しさの両立という文化的内実が見られる。それは、近代的河川整備の「物的基準値」重視のやり方を超えて、「物的基準値」と「ココロの基準値」の相互的同時的向上の過程を重視するという21世紀の河川整備・まち育ての方法の特徴全体を示唆している。

とともに、学校における総合的学習に川が活用されることは増えてきてはいるが、往々にして体験と理科的調べ学習の域にとどまる傾向が強い。しかし、ここには、理科も社会も国語も演劇も美術も横断的な創造的な総合的学習の普遍的方法の一端がのぞいている。

現代社会の危機と対面しながら、「川の日」ワークショップは、人間の生命的尊厳と河川の生命的尊厳を共に大切にする社会の到来に近づこうとする試みである。そのことを夢想しつつ、本ワークショップのさらなる発展的継続を願っている。

NPO法人まちの縁側育み隊・代表理事
「川の日」ワークショップ・総合コーディネーター
延藤 安弘